



漫画家・エッセイスト

柴門ふみさん

人気漫画家柴門ふみ氏は、ウィキペディアによると、「女性青年漫画家の草分けの一人」と位置づけられている。1980年代の終わりから1990年代にかけてのバブル期に、「同・級・生」「東京ラブストーリー」「家族の食卓」「あすなる白書」「非婚家族」などを次々とヒットさせ、それらはテレビドラマ化されて、街に、家庭に流れていった。昨今は瀬戸内寂聴氏の「美は乱調にあり」を漫画化したり、怪談専門誌に怪談漫画「奉納人形」を掲載したりと相変わらずの精力的なご活躍である。（聞き手・構成：味岡 康子）

— 柴門さんは徳島のお生まれですが、徳島県人の気質はどういうものですか。

おっとりしてのんびりして明るいですね。でもケチかなあ（笑）。北と南でちょっと違うかもしれません。

— ネットでは、徳島女性の性格というのは、働き者で活動的、経済観念も発達しているが、気が強く、やや素直さに欠けるところはあったとありました。

要するに働き者でしっかり者ですね。男がちゃらんぽらんで（笑）全然しっかりしていないので。

— よく土佐の方は、男性がいいかげんなので、女性が、かあちゃんたちがしっかりしているといえますね。

でも、徳島と違って、土佐の男は大酒飲んでもしっかり魚釣りしているイメージありますけどね（笑）。徳島はわりと温暖なのです。

— ご両親はどういう方でいらしたんですか。

祖父は一代で事業を拡大した人ですが、その子供が母を含め3姉妹だったので、婿養子を3人取ったという女系家族です。私を含め、そこに孫が6人、男の子1人で5人女だった。だからいつも女だらけで

女が強かったんですね。他方、父はもう60代のうちに亡くなりました。

— 柴門さんのごきょうだいは？

姉が1人の2人姉妹です。

— 小学校前、小学校時代、中学校時代そして高校時代、振り返ってご覧になると、一番楽しかったころはいつごろですか。

小学校ですね。小学校は、徳島大学、今は鳴門教育大に変わりましたが、当時は徳島大学教育学部附属というところに通っていました。徳島市は、川の中洲が発達してできた町なので、市内いたるところに川が流れていて、小学校も川のそばにあって、授業中、窓から川を見たり、家に帰ったら友達と川の土手で遊んだり、楽しかったです。

— 泳ぐこともできたんですか。

泳ぐのは少し上流の方に行かないと。市内の川は無理ですね。でも、普通に自然に親しんで、楽しかったです。それと本を読むのが好きだったので、市立図書館に通ってよく本を借りてきて読んでいました。

——柴門さんご自身の年表によると、小学校5年でグループサウンズに目覚めてテンプターズのレコードを買ったと。小学校5年というのは早いんですね。

3つ違いの姉がスパイダースのファンだったんです。私はテンプターズの方のファンで、テンプターズのLPも買いましたね。

——次に、小学校6年でフォーク・クルセダーズのファンになり、レコードを買われたと。でもフォークって結構、変化球じゃないですか。

『帰って来たヨッパライ』が大ヒットして、『イムジン河』とか『悲しくてやりきれない』などヒットが立て続けだったんですよ。

——でも小学校6年で熱中する（笑）。

ちょっと人よりおませかもしれないですが、それも姉の影響だと思いますね。姉は音楽が好きで、ローリング・ストーンズとかビートルズを聴いていましたね。背伸びして姉にちょっと追い付きたかったのかもしれない。

——漫画に夢中になったのは、いつぐらいですか。

まず小学校ですね。小学校低学年のころは本当に漫画が大好きでした。6歳年が離れた女のいとこがいて、読み終わった少女漫画を全部くれました。『りぼん』『なかよし』とか、たぶん『マーガレット』とか『少女フレンド』だったと思うんですけど。

——ああ、何か懐かしい名前が（笑）。

それをもって、何度も何度も繰り返し読んでいましたね。そのうち少年漫画も読むようになって、手塚治虫先生とか石ノ森章太郎先生の、ちょうど『鉄腕アトム』とか『サイボーグ009』の時代でした。少年漫画の方が好きだったかもしれないです。

——小さいときに漫画に夢中になる場合に、漫画を描きたいという場合と、描かないけどもっとその世界に浸り

たいという場合があると思いますが、どちらでいらしたんですか。

当時、私を含め、お絵描きの好きな女の子たちは一生懸命、少女漫画の牧美也子先生とか、わたなべまさこ先生の女の子たちの顔をまねして描いていました。それがだんだん今度は漫画雑誌の1ページをそのまま模写し始めました。それでコマを割って、せりふも書いて、下手ですから、そんなそっくりは描けないんですが模写するのが好きだったんですね。それで何ページかまねして描いているうちに、まずせりふを変えたんですね。このせりふじゃなくてこっちがいいんじゃないかなど。次に絵を変え始めたんですよ。ですから途中から全然違うストーリーになっていったんですね。

——柴門ふみさん自身の漫画になっていったわけですね。

全然違う結末の漫画に変えたりした。それが始まりだと思います。そうしてだんだんその登場人物の顔、男と女の顔だけもらって、いきなりオリジナルストーリーを描くようになった。それが小学校3年生ぐらいでしたね。

——中学2年のときが昭和45年、大阪万博のあった年です。まさに日本が高度成長に向かうときで、世の中が熱気にあふれて、元気がよくて華やかな、そういう感じというのはおありでしたか。

何せ田舎でしたから、徳島は、そういう日本がわき返っていることが届かないんですよ。当時はすごく不便で、橋も架かってなくて、電車で行こうと思うと、徳島から東京まで7時間ぐらい。大阪とか東京がにぎやかな感じなのに、徳島はまったく死んだような町で（笑）。死んだってちょっと語弊がありますね。眠ったような町でした。よく言われたのは、徳島の人阿波踊りの4日間だけ目が覚めて、残りの361日は寝ているって、まさにその通りなんです。私は中学生のころにもうその徳島が嫌で、退屈で死にそうだったので、とにかく徳島を出たいと思いだしたのが中学2年ぐらいですね。

柴門ふみさんの近著



『美は乱調にあり』

柴門ふみ 原作・瀬戸内寂聴
文藝春秋／2014年5月22日発行

大正期最大のアンアーキストにして、危うい魅力を放ち幾多の女性と浮名を流した大杉栄と、彼の妻となり、共に甘粕事件で虐殺された「青鞥」最後の編集者伊藤野枝。女性の自立を志し、大いなる愛と情熱を胸に時代を駆け抜けた野枝と「青鞥」の女たちに刺激を受けて『東京ラブストーリー』の赤名リカのキャラクターを考えたとする柴門ふみさんが、大杉と野枝の生き方を描いた瀬戸内寂聴さんの原作を漫画化。百年前のお話とは思えぬ瑞々しさと新鮮さ、野枝や大杉の躍動感あふれる姿は、現代に通じる瑞々しさ！

— 高校に入り、一条ゆかりさんの『デザイナー』にとっても影響を受けたとおっしゃっています。

実は、しばらく中学、高校のとき漫画をあまり読んでなかったのですが、高校2年か3年のときに、『りぼん』が今面白いと勧められて読んだら、一条ゆかり先生の『デザイナー』という漫画の連載が始まっていて、めちゃくちゃ面白かったんですね。それまで少女漫画というと、ちょっとグズでドジでダメな普通の女の子が、なぜかかっこいいバスケット部のキャプテンに好かれてしまうみたいな、そういうかわいい女の子の主人公が主流だったのですが、その『デザイナー』は、主人公の亜美という女がクールで、大人で、人を踏み台にして、野心でのし上がっていくような女で。

— 何か映画の『プラダを着た悪魔』みたいな？

悪女というか、つまりにくたらしい女が主人公で、ちゃんと読ませる物語なのがまず一番驚いたんですね。それと、少女漫画ではありますが、ベッドシーンはあり、大人の嫉妬とか恋愛感情がちゃんと描かれていたんです。これがすごく面白くて、こういうことが表現できるんだったら漫画を描きたいなとそのとき強く思いました。

— 一条ゆかりさんはまだご活躍ですか。

元気で、素晴らしいです。1949年生まれの現在65歳ですが、あのころの先生は、高校生にならないぐらいの14～15歳でデビューしているんです。里中満智子先生はデビューが中学生か16～17歳じゃないですか。当時は、少女に気持ちが近くて、少女の気持ちがよく分かる、読者に一番近い年齢の人がデビューして、実は20歳になると引退みたいな。私が中学生のときは、少女漫画界はまだアイドルみたいな世界だったんですね。

— そのアイドル界というのは？

里中先生、一条先生。それがちょっと変わるのが、萩尾望都先生、大島弓子先生、竹宮恵子先生あたりが一条先生と同世代なんですけど、少女漫画の違う方向性を開拓されていったんですね。非常に文学性が高い少年愛的なものを。私はもっとリアルな恋愛の方に興味があって、そちらにはあまり行かなかったんです。

— 昭和50年にお茶の水女子大に入学して、漫画研究会に入られたそうですが、漫研は部員が何人ぐらいいたんですか。

私が入った年はまだ漫画研究会がなくて、漫研が創設された年でした。当時の2年生の2人が創設者です。それに私と、私の同学年がもう1人いたのかな。私は漫画好きが集まって、漫画について語り合うところと思って入ったんですよ。そうしたらいきなり先輩が、漫画描きなさいと。私は、鉛筆で小学校3年のころ描いていましたけど、あとは全然描いていないので、分からないと言ったら、教えてあげますと言われ、初めてそのときに、つけペンというペンを使って全部教えてもらって漫画を仕上げました。

— それで『平凡パンチ』とか朝日新聞に作品が載ったそうですね。

『平凡パンチ』は漫画でなく、女子大に漫研ができたということの取材を受けて、写真が載りました。朝日新聞は大学漫画研究会がリレー形式で漫画を載せていたときがあり、それにギャグ漫画のタッチで、寮の門限だから帰らなくちゃいけないという私の4コマ漫画が掲載されました。

— 大学3年、昭和52年に、弘兼憲史さんと会って、アシスタントを始められたそうですが、弘兼さんの印象はいかがでしたか。

彼は10歳年が離れていて、私が20歳のとき29歳か30歳だったんですが、サラリーマンを辞めて漫画を描いている人でした。学生ですからすごく大人に見えましたね。

— そうすると弘兼さんというプロの漫画家と出会って、漫画を描く上で、目からうろこ的なことというのありましたか。

目から本当にうろこが落ちましたね。それまでほかの大学の漫研の人と交流もあって、お互いの作品の見せ合いはしていたのですが、初めてプロの原稿を見て、線とか仕上げがこんなにも美しいのかとびっくりしました。うちの夫は絵が特にきれいですが、新人のときからすごくきれいな線を引いていましたね。

— 大学4年でプロ漫画家を目指したというふうにお聞きしていますが、卒業1年目の昭和54年に漫画家デビューされましたね。

漫画家になれる自信がなかったので、大学4年のときは、大学院に進もうか就職しようか考えていました。でも私の時代というのは私が地方から出てきていましたし、就職は全然なかった。大学院もみんなが目指していたし、特に私は美学美術史が専攻だったのでそこも多分難しそうで、どうしようかなと、大学4年の春ごろ、ぼんやり考えていたときに、たまたま同人誌の私の作品を見た講談社の方が、プロになる気があるんだったら作品を持っておいでと言ってくれて、それでもうこれに賭けようと思い、就職もやめ大学院もやめて、新人賞用の漫画を大学4年の夏に描きました。それで秋に持っていったところ、面白いから載せてあげるよとなりました。

— それで卒業2年目の昭和55年に弘兼さんにご結婚されました。その結婚の決め手というのは何でしたか。

アシスタントに行くと仲良くなっていたんですが、彼は売れっ子の漫画家でもないし、連載もそんなになくて、暇が多くて、原稿料も安かったですし、果たして漫画家としてやっていけるかどうかは私に分からなかったんですが、ただこの人は漫画家になれなくても、何をやっても生きていける人だなと思ったのが決め手です（笑）。

— 弘兼さんは、外から見ると理想的な夫像に見えますけど。

夫としてはまったくだめでしたね。とにかく家族と過ごすのは正月3日間だけ。ずっと仕事場に来て、家に戻ってこず、仕事場で寝泊まりして、子供のために休みを取ることはほぼゼロでしたね。家庭に対してはもともとあまり興味のない人だと思います。

— でもそれだけ仕事をしてくれれば、亭主元気で留守がいいじゃないですけど。

家事と育児は全部私に来るわけですよ。エネルギーで、明るくて、屈託はない人ですが、ただ後始末する家族が大変ですね。

— それはしっかり者の柴門さんが引き受けるということで。

いろいろなことを全部丸投げされるので、私は自分の仕事もあるから大変なんです。

— そのご苦労はわかるのですが、漫画家のお仕事は、家事、育児と両立しやすいかなと西原理恵子さんなどを見て思うのですが、それはいかがですか。

漫画家ですけども、私は仕事の時間を10時～5時と決めていたので、朝、子供の朝ご飯とお弁当を作って、行ってらっしゃいと言ったら私も仕事場に行って、それで5時に戻ってきて、ご飯を作って一緒に食べて、宿題を見てお風呂に入って、おやすみなさいというのをやっていたから。

— 保育園に入っていたんですか。

家のすぐそばに、歩いて3分ぐらいのところに幼稚園があったので、そこに入れ、送るのは私が行っていましたが、母にお迎えなど頼んでいました。

— 働く女性は、自分の母親が補助してくれないとなかなかしんどいですよね。

しんどいです。無理でしたね。

— 恋愛論に詳しい柴門さんからみて、現在、結婚前の男女が一番悩んでいることは何だと思われますか。

結婚前の男女は、まず相手がいないという人が結構いますね。それとお金がなくて結婚できないという人もいます。女性の場合、結婚したら仕事を辞めなきゃいけないのかということで悩んでいる。この3つだと思いますね。

— 現在はだんだん恋愛のハードルが低くなり、例えば

恋愛のノウハウも情報があり、男女の別も、既婚か未婚かという一夫一婦制もあいまいになり、そうすると恋愛は盛んになるのか、むしろ衰退していくのか、どちらだと思われますか？

今、何か恋愛って衰退していますね。あまりに自由になり過ぎると、人はふぬけになるんだと思います。極限状態に行くと、生き延びるために本能が出てくる。恋愛は色気とか、やっぱり本能部分だと思うんです。だから韓流の韓国の男優さんがすてきと日本の女性は思う。韓国の男性ってみんなやはり色気があるんですよ。徴兵があることの影響もあると思いますし、儒教が厳しいので、ストイックだと思いますね。

— タブーがまだあるんですね。

日本だとあまりにも自由で甘やかされていて自分を追い込めてないので、まだ色気などの本能が眠ったまま、子供のまま、未成熟なまま40歳ぐらいになっている男女が多いような気がしますね。

— 男女ですか。

女もですね。まだ少女のまま40歳で、もちろん出産もせずに、気付いたら40歳だったわみたいな人が増えていると思います。やはり生殖本能が未発達なので、なかなか結婚して子供をつくるまで行かないから、少子化なんじゃないかなと思いますね。

— 恋愛はセックス、生殖行為の端緒でしょうが、恋愛のときには、違う文化なり違う世界なり、そういうものを獲得したいという欲求もあると思いますが、弘兼さんは違う文化がありましたか？

彼は山口県の人ですけど、あまりにも異文化で最初はびっくりしましたね。

— 山口県の方って結構男社会の気風ですか。

そうです。どっちかという男を立てる。それで男はやっぱり天下を取らなきゃみたくない、そういう風土です。

今、何か恋愛って衰退していますね。あまりに自由になり過ぎると、人はふぬけになるんだと思います。極限状態に行くと、生き延びるために本能が出てくる。恋愛は色気とか、やっぱり本能部分だと思うんです。

柴門ふみ



——長州藩で天下を取ったんですものね。

男なら、とにかく中央に行って天下を取らなきゃという県なんですよね。佐藤栄作，岸信介ら，政治家がいっぱい出ていますね。

——異文化でいうと、お付き合いをして一番最初にショックだったことは？

あまりにも昔のことですが(笑)。旅行に行くときは、ぼろぼろで捨ててもいいような下着，シャツとパンツで行って，向こうのごみ箱に捨ててくるとトランクが軽くなって，そこにお土産物が入られる，というのを聞いたときにびっくりしました。また，アシスタント時代に一番驚いたのは，田舎のお母さんから手紙が来ると，読んだらぱつとごみ箱にすぐ捨てたことです。何で捨てるんですかと言ったら，いや，もう読んだからというので，これはすごいなと(笑)。下着も親の手紙を捨てられるのも，合理主義の人だからでしょう。私はそれがちょっと冷たい部分があるなと思うんですけど。私は旅先でお掃除に来た人が，何でこんなのを捨ててあるんだと見られる方がよっぽど恥ずかしいと思うんですけどね(笑)。

——最後に，弁護士や司法界に対する注文やご意見がありましたらお願いします。

刑事事件の裁判のニュースを見ると，事実こそかもしれないけれど，今の時代の人の気持ちは違うのに，古い日本の家族制度，つまり明治時代に作られた常識レベルでまだ裁かれているのかと思うことがあります。例えば女性が何かに巻き込まれたときに，彼女は風俗店でバイトをしていたので，男に殺されても文句はないという流れに持っていくのは違和感があります。娘時代から複数の男性の出入りがあるとイコールふしだらみたいな図式ができています。それはもう偏見のレベルですよ。複数の男性が出入りしても，短期間で本当に好きになって別れて，本当に真剣に人を愛して別れたのかもしれないのに，何でそういうことを短絡的に言うのかなと感じることはありますね。

プロフィール さいもん・ふみ

徳島県出身。漫画家、エッセイスト。お茶の水女子大学在学中から、弘兼憲史氏のアシスタントを務め、1979年に漫画家としてデビュー。「東京ラブストーリー」「家族の食卓」「あすなる白書」「お仕事です!」「華和家の四姉妹」「同窓生～人は、三度、恋をする～」など著作は多数あり、ドラマ化されたものも多い。「最後の恋愛論」(角川書店)などエッセイストとしても活躍。